

論文の内容の要旨

論文題目 説明理論としての質料形相論

氏名 ムン 文 キョン 景 ナミ 楠

本論文の目的は、従来アリストテレスの存在論の核心をなすものとして理解されてきた質料形相論を、多彩で柔軟な説明を与えることを可能にする説明理論として捉え直し、このように提示された新たな質料形相論理解に基づいて、現代の心の哲学とアリストテレス哲学との距離を測ることである。

アリストテレスの質料形相論、特にそれを基盤とするプシューケー-ソーマ論を、現代の心の哲学の何らかの立場として解釈しようとする試みが、二十世紀後半から盛んになされてきた。いち早くそれに加担した論者たちは、当時の最先端の心の哲学の理論であった機能主義を擁護または補完するものとしてアリストテレスを理解することができると主張したが、このような解釈はその後様々な批判に曝された。本論文で私が出発点とするのは、機能主義的解釈が後退した以後に、それに代わるような中心的な解釈が現れなかったということはどう理解するかという点である。

機能主義的解釈が引き起こした論争を受けて、アリストテレス研究者たちは、アリストテレスが心の哲学における一元論者なのかそれとも二元論者なのか、あるいはその中間にある何らかの立場を提示しているのかといった点を見定めるために、プシューケーとソーマの理解を中心に様々な論点を検討してきた。しかし、その結果何らかの合意が得られたということはなく、論争は今も細分化し続け収斂する気配をみせない。私は、このような混乱が生じた理由が、プシューケー-ソーマ論そのものの根幹となっている質料形相論の適

切な理解を論者たちが有していないことにあると考える。本論文は、このような問題設定に基づき、質料形相論の再解釈を遂行することを目指すものである。

本論文で私が足がかりとするアプローチは、質料と形相がそれに属すとされるアイティアーをめぐる論争を確認することで得られる。アイティアーをめぐるのは、これを原因と理解するかそれとも説明と理解するかという点で解釈上の対立が続いてきた。原因と説明は必ずしも対立する概念ではないため、それぞれの理解を採用した場合にどのような相違が生じるのかといった点そのものが、激しい論争の対象になっている。本論文で私は、説明としてアイティアー（同時に、それを構成するものである質料と形相）を理解するという方針をまず選択した上で、それにそった質料形相論理解を提示することを目指す。その作業が終わった後に、私は説明と原因の対立をどう理解するかという問題へと立ち戻ることになるが、これは同時に質料形相論と現代の心の哲学との距離を測ることにもつながる。

本論文は、序論と結びを除いて全七章からなる。先行研究をまとめ以降の論述の方向性を定める第一章に続き、第二章から第四章までの三つの章では主に質料の解釈が、第五章から第七章までの三つの章では形相の解釈が行われる。以下では、章立てにそって議論の流れをまとめる。

序論では、上で概要を与えた問題設定と方法論がより詳しく述べられ、それに基づいた本論文全体の見通しが与えられる。

第一章では、アリストテレスのプシューケー-ソーマ論とその基盤となっている質料形相論を現代の心の哲学として解釈することを試みた先行研究が、どのような困難に達したのかが描かれる。このような試みの嚆矢となった機能主義的解釈は、その後様々な論争を引き起こした。問題は、研究者たちが、機能主義的解釈以後にその代わりとなるような有力な解釈を見出すことができなかったということである。このような事態が生じた原因の一端は、従来現代的な心と身体に（いかに奇妙なものに見えようと）何らかの仕方で対応すると考えられてきたプシューケーとソーマが、そのような対比を許さないような要素を有しているように見えるという点にある。求められるのは両者の距離を正確に理解することだが、そのためには結局プシューケーとソーマの基盤となっている形相と質料の概念を再解釈することが必要となる。本論文の以降の章で私は、このような課題を正面から引き受けることを目指す。

質料と形相を解釈するに際して私がとるアプローチは、生成変化を説明するための理論を構成するものとしてそれらを捉え直すというものである。その課題が最初に着手される

第二章で私は、まず質料の概念の再検討を行うために、アリストテレスがそれに帰している関係性と無規定性という特質を考察することから始める。青銅や煉瓦といった通常質料の例として挙げられるものに基づく限りでは非常に理解しづらいこれらの特質を位置づけるために、私はエレア派による生成変化の懐疑への応答として導入されたというその出自から質料概念を見直す。その結果、質料は、青銅や煉瓦といった、問題となる生成変化への言及を含まない形でそれ自体のアイデンティティをもつ存在者を同定するための概念としてではなく、それぞれが不可欠な役割をもって互いを補う自体的な説明と付帯的な説明をとともに用いることで、様々な説明を織りなすことを可能にする説明理論を構成するものとして理解されなければならないということが明らかになる。

第三章では、このように理解された質料概念に基づく説明理論が、具体的にどのような説明を与えることができるのかを、質料概念の理解を阻むもう一つの要因となってきた同名異義原理を解釈することで明らかにする。同名異義原理が提起する、アリストテレスが与える質料的説明はトリヴィアルかつ循環的であり、よって無意味なものなのではないかという批判に対して、私は実際のところアリストテレスは様々な質料の基準を用いており、一つの遠近の下でそれらを位置づけることで、奥行きを伴った質料的説明を与えることができるかと応答する。そこからは、質料概念が可能にする説明が、非還元的だが強い説明力をもつものであることが示される。

第四章では、質料概念が可能にする説明がどのようなものなのかをさらに深く理解するために、間違った質料的説明を修正するような枠組みをアリストテレスがもっていたのかという問題を扱う。そこで明らかになるのは、アリストテレスが、何かを質料として提示することを、それが質料であると述べることの根拠となる理由を挙げることに非常に密接に捉えていたという点である。理由の重視は、同時に間違った質料的説明をその理由に基づいて修正することを可能にする。

第二章から第四章までの考察で示されるのは、自体的説明と付帯的な説明を組み合わせながら、その詳細や適切さにおいて様々な度合いをもつ多彩な質料的説明を（その修正可能性をも残した形で）与えることを可能にする学問的な説明理論を構成するものとしての質料理解である。このような質料理解は、生物の質料として導入されたソーマを、特定の存在者を指すために導入された現代の身体と並列して比較することの不適切さを明らかにする。何かの質料が特定の存在者として同定されることはありうるが、それは質料概念に基づいて説明を与えるという営みの一部を構成するものに過ぎないのであり、質料概念がもつ本当の意義は、そのようなものをも含めた形で様々な説明を織りなすことを可能にする

理論を与えるという点にあるからである。

本論文の後半部で私は、説明理論を構成するものとしてそれを理解するという戦略が、質料の対となる形相に対しても適用可能であるのかを検討する。その出発点として第五章で論じられるのは、近年アリストテレスの感覚論をめぐる生じた一つの論争である。ここでは、感覚的变化に対応する物的変化の存在をアリストテレスは認めているのか、また、認めている場合その物的変化の内実を彼はどのように理解しているのかをめぐって、三つの立場が激しく対立している。この論争に参加することで私は、感覚的变化に対応する物的変化の存在を否定する解釈や、その存在を認めるがその内実を、赤いものを見る時に眼が赤くなるといった字義通りの物的変化に求める解釈を退ける第三の立場を擁護することを試みる。その過程で、物的変化の有無やその内実の解明と表裏の関係にあるものとして、形相の役割をどのように位置づけるかという問題を扱うことの必要性が浮かび上がってくる。

私が退ける二つの立場は、他の対象との関連から理解されるものとして形相を捉えることを拒むものであり、結果的に何かを説明することをその本質的な役割として形相を理解することを難しくする。私の擁護する第三の立場は、形相を他のものとの関係から切り離すことを要求するものではないが、形相がどのような仕方で事物を説明するのかという点を直ちに示してくれるわけではない。第六章で私は、この点を明らかにするために、形相がいかにして事物を説明するのかを、アリストテレス哲学における自然学者の営みの位置づけなどを検討しながら論じる。

説明理論を構成するものとして形相を理解することの内実を示した後、続く第七章において私は、形相をこのように理解することに対して最大の障害となる、形相の存在における離存性と「質料抜き」という特質をどのように処理するかを論じ、私の質料形相論理解を擁護することを試みる。これら両者は、どちらも形相を端的にそれ自体で存在しうるものとして理解することを強いる。これに対して私は、存在における離存性や「質料抜き」といった特質は形相に対して限定的にのみ適用可能なものであり、それによって説明理論を構成するものとして形相を理解するという方針が頓挫することはないと主張する。

結びでは、上のように再解釈された説明理論としての質料形相論（及び、それに基づいたプシューケー-ソーマ論）が、現代の心の哲学とどのような距離をもつのか、また説明と実在との関係についてどのような示唆を与えてくれるのかを論じることで、序論での問いに答え本論文を締めくくる。